

「文明研究と文明学科」

はじめに

一 文明学科をどう考えるかという場合、当然、二つのことを問題にしなければならない。一つは、「文明」という言葉で表現される内容もしくは対象を明確にすることであり、他は、それを具体的に追及するための方法論を模索し、実行することである。そしてこれらの二つは明らかに互いに不可分な関係で連動している。

二 ところがここに次のような非常に厄介な問題が持ち上がる。

- (1) 「文明」という言葉によって理解する内容——ここでは「文明の定義もしくは概念」という表現は敢えて避けたい。「定義」、「概念」はしばしば簡潔な言語表現によってとらえるには手に余る対象を狭い枠に閉じ込め、歪めてしまう危険を孕んでいるからである——がきわめて多様であり、ほとんど共通の基本的な了解すら得られていないということである。
- (2) このことは、文明に関する理解の仕方が多様であれば、その方法論もまたそれに応じて多様になることを意味している。

これは文明学科が直視し、再度確認しなければならない大前提である。

渡瀬 信之

三 文明学科の在り方を考える場合、道は三つに分れるかもしれない。

- (1) 「文明」に関する理解の多様さをそのまま容認し、それぞれの理解に即した方法論に基づいて具体的な個々の授業を進める。
 - (2) 一定の文明観を持ち、かつカリスマと強力なリーダーシップを備える特定の個人のもとに結集し、かれの文明観と方法論にしたがってそれぞれの領域において協力体制を敷く。
 - (3) 「文明」に関する理解の多様さを認めると同時に、それらの中に基本的な共通の理解と方法論を探り出し、文明研究のためのいくつかの柱を立てる。
- (1)の道は文明理解に関する現状にあっていうようであるが、そのままでは文明研究のための方向が見出せない。
- (2)の道は、一定の方向を見出せずにはいられないときはなかなか魅力的である。しかしそれはあたかも混乱状況にある国家が独裁者を待望するのに似ている。

(3)の道は、取るべき道としてはもっとも穩当のようである。それは多様な文明觀を許容すると同時に、一定程度の総合の努力とそのためシステムの作りを含んでいる。

文明研究に関する私見

一 文明研究に関する共通の理解。

- (1) 今日において、文明を云々するという発想は、そもそもは、複雑怪奇になり、とらえどころのなくなった世界、あるいは危機的な状況を益々露骨にしている地球をどうにかしなければならぬということから生れたものではなかつたか。
- (2) しかしそのことは、文明研究は現代世界のみを対象にするということを意味しない。求められているのは、現代世界の危機を契機として、もう一度、人間の営みの全体を現代を含む歴史的な流れと地域的な拡がりの中で検討しようとすることである。実際に、文明学科はこのような目的のもとに設置されたことを再確認する必要がある。

二 「文明」は全体概念として適切か？

- (1) 文明研究について論じていながら、この問題を提示することは混乱を招くことになりかねない。しかしながら、もしもわれわれの文明研究の眞の狙いは左記の一に述べられたことであるとするならば、「文明」という概念あるいは用語に拘泥する意味はあるだろうか。文明概念は人間の営みの全体を

包摂しえるであらうか。

- (2) 文明の発生を文字や都市の成立と関係させたり、「文明と野蠻」とか「文明と未開」という問題のたてかたは、明らかに文明を相對概念とみなしている。他方では、文明を全体概念として成り立たせるための新たな概念規定を試みる。しかしこの試みは既存の文明概念と不毛な鬭争を展開しなければならぬ。「文明」という言葉にはあまりにも手垢がつき過ぎてゐる。そしてその垢が氣になり、ついついこたわってしまふ。

- (3) われわれの目指すところが左記の一であるとするならば、

- ① 文明を全体概念として盤石にすべく努力するか、
- ② あるいは「文明」という言葉の呪縛から解放された何か別な用語を設定するかが必要であらう。

三 「文明」という概念および用語に拘泥せずに人間の営みを全体的に考察するための方法論について。

- (1) 現代世界を考察するための方法を模索することが最良の手掛かりであるように思われる。なぜならば、現代ほど全世界が互いに不可分に關係し合ひ、人間の営みを全体的に考察することを強制している時代は見当らないからである。

(2) 現代世界の認識

現代世界は、世界ないし地球をグローバルにとらえることを強制している。もしもグローバルな地球、世界ということ

問題意識の出発点としかつ戻ってくるべき帰着点であるとなすならば、例えば、次のような事実を根本命題とすることが可能ではないか。

①世界は無数の「構成要素」——国家、民族、宗教、政治、経済、自然等々——から成り立っている。

②しかもそれらの要素のどれ一つとして孤立して存在するものはなく互いに密接に関係し合っており、そしてそのことは不可避である。

③世界ないし地球の在りようはそれらの「要素間の関係」のいかに係わっている。要素間の関係の安定、均衡は世界全体の安定、均衡をもたらし、関係の不安定、不均衡は世界全体の不安定、不均衡をもたらす。

④要素は本質的に互いに異質である。

⑤要素間の不均衡、対立、摩擦は不可避である。

(3) 現代世界においては、重要なファクターは「文明」ではなく、「要素」と「要素間の関係」とりわけ後者である。我々のなすべきことは、

①重大な要素を抽出すること。

自然、人間、国家、民族、宗教、経済、政治、科学etc.

②重大な要素間の関係についてその仕組みを明らかにすること。

③要素間の関係が他の要素ないしは全体に及ぼす影響を徹底的に追及すること。

④とりわけ要素間の対立関係、摩擦、不均衡が問題にされるべきかと思われる。

生態系・自然と人間生存との対立関係
経済摩擦、文化摩擦etc.

(4) 以上のように現代世界について認識するとき、人間の営みを全体的にとらえるために果して「文明」概念はどれほどに強力な武器たりえるであろうか。社会なり世界なりあるいはいわゆる文明の成り立ちを「要素」および「要素間の関係」に還元するという問題のたてかたはあらゆる時代のあらゆる社会・世界・文明に適用可能ではないか。

文明学科における文明研究と教育活動

一 人間の営みの全体を現代を含む歴史的な流れと地域的な拡がりの中で検討しようとするとき、研究自体はもとより授業などの教育活動においても協同と総合の作業を不可欠とする。

二 この事に関して了解しておかねばならないことは二つである。

(1) いかん文明学科の専任とはいえ、全ての研究活動と教育活動とを総合作業のためのプロジェクトに捧げるわけにはいかない。それぞれは既成の専門領域を持っており、そこにおける自らの研究活動を自負しかつ周囲からもその成果を期待されている。そしてなによりもそれぞれの学問領域における個別の研究の成果なくして総合研究は成り立ち得ない。それらを放棄することは文明研究自体の自殺行為で

あるに他ならない。

(2) しかしながら、既成の学問領域と既成の方法すなわち現在それぞれが論文を書くときに実行しているような方法に拘泥することは、グローバルな文明研究にとって積極的な力にはならないことを認めなければならない。

三、以上のことから、文明学科の専任スタッフにもとめられるのは、それぞれの研究領域において自らの信念に基づいた方法にしたがって研究及び教育活動を継続する一方において、人間の営為を総合的にとらえるための、歴史と地域と専門領域の立場からの貢献を惜しまないことである。